

MORIYA滞在記

永遠のダ・カーポ



駐日ドイツ大使館の庭園に古い鐘があります。

その表面には日独友好を表すためにゲーテの言葉が刻まれています。「響きが消えても調和は残る」、3年前大使館を訪問したときに、鐘の深い音色より心に響いたのは、その言葉でした。

学校の卒業寸前に広がる雰囲気はどこか似ている。今、どうでもよかった事が、一気にとても重要に感じてきたり、今まで苦手だったことが好きになったりする日々を過ごしています。それを気付かせてくれたのは、周りの物音でした。実は、静けさがとても重要視されるドイツで育った私にとって、初めて来日したときが一番大きなカルチャーショックは、鳴り止まない背景雑音でした。守谷市役所も、事務所が広く、人が多いため、けっして静かとは言えない場所

です。しかし、最近あることに気づきました。足音、ドアを開け閉めするときの音、キーボードを打つ音、全てが人によって違うということです。実家の階段を上ってくる人が誰か足音だけで分かるのと同じように、時間が経つにつれて周りの人を音で判別できるようになりました。この物音も、この風景も、目の前にある全てを保存できるように容器に閉じ込めたいほど、8月が近づけば近づくほど焦ってしまう自分がいます。しかし、もしかしたら、周りの雑音と同じように、少し落ち着いて耳を澄ませば、また何か大切なことが聞こえてくるかもしれません。そう思ったら、あの鐘の言葉が再び心の中で響き始めました。

音楽の世界では「ダ・カーポ」というイタリア語の演奏記号があります。曲の始めに戻る指示です。考えてみれば、この今も終わりではなく、ダ・カーポかもしれません。新しい国際交流員の来日で、この曲は新しく始まるのです。私たちが生きていることで本当にメロディーを作れるなら、守谷市の国際交流員たちがここで活動していることで、それぞれの声をカノンのように重ねていき、一人一人の声が区別できなくなるほど響き合う交響曲を作るのではないかと思います。これは最初から私だけのメロディーではありませんでした。これは様々な人を繋ぐ永遠に繰り返す調べです。その中から一人の響きが消えても、この調和は残ります。

次回はカーテンコールになります。新しい幕が開くまで、あと少しです。

およそ3年間のロンドンでの大学院生活を経て東京に戻り、小さな出版社に就職した僕は、仕事の関係もあって展覧会のオープニングレセプションに顔を出すようになりました。そこで、同世代のアーティストやキュレーターに出会っていきます。ヨコハマトリエンナーレなどが始まり、現代アートが少しずつ世に広がっていきこうとする2000年代の初めのこと。お金も人脈もなく、

ディレクター小澤慶介コラム
「キュレーターになるまで」
(後編)

ARCUS

Artist In Residence - IBARAKI

現在のアート・芸術文化を守谷から。

- 問合先 アーカススタジオ (もりや学びの里内)
- 日・月曜日休館 ☎ 46-2600 (10:00 ~ 18:00)
- ✉ arcus@arcus-project.com
- ◎ 詳細な情報はアーカスプロジェクトで検索!



とみい ちとひろ
富井大裕「企画展=収蔵展」ツアーの様子

時間と好奇心だけはあった僕は、小さな読書会や展覧会を開いては、集まった人たちとあれこれアイデアを交わしていました。やがて、気心知れた仲間とNPO法人を立ち上げて現代アートの学校や展覧会を企画するようになるのですが、僕自身がキュレーターであることを意識するのは、それから10年後のこと。2010年代に入って、少しずつ芸術祭や美術館から声を掛けられるようになってからです。人生、何が起るかわからないですね。

今でもやはり実験的で小さな場づくりは好きで、これから世に出てゆくアーティストと展覧会をつくったり、現代アートをより多くの人たちに伝えたりすることにやりがいを感じます。アーカスプロジェクトもそのような場になると良いなと思っていますので、皆さんイベントのときなど、気軽に来てください。